

くに「岩亀楼の家造りは、しんきゆう盛気楼のごとくにして、あたかも龍界にひとしく、ふづき文月の燈籠、にわかおどり葉月の俄踊、もん日／＼の賑ひ、目をおどろかし、素見ぞめきは和人、異人打まじりて、晝夜を分わかず」という盛況であった（『美那登能波奈横浜奇談』）。こうして港崎遊廓は、年とともに繁栄におもむいたが、慶応二年十月二十日（一八六六年十一月二十六日）には火災によって焼失し、のち吉田橋の南方、吉田新田の地に移る。

居留地につらなつて、日本人の町も形成された。開港後一年にして、二百軒ちかくの商人が横浜に店を開いたが、その大多数は生糸商人であった。

### 横浜浮世絵

開港場の横浜に進出したのは、商人ばかりでない。江戸の浮世絵師たちも、新しい画題を求めて、異国情緒みなぎる横浜に進出した。そのころ江戸の浮世絵は、春信や歌麿などのあらわれた黄金時代を過ぎて久しく北斎や広重の風景画によって、一時は人気を回復したものの、その後は低落の一途をたどっていた。そこに横浜が開港し、いままで目にふれることのなかった異人たちが、大量に渡来してきたのである。居留地に住みついた異人たちの生活、風俗は、長い鎖国のなかにあった日本人にとって、まさに目を見はらせる珍奇なものであった。

いまや浮世絵師は、またとない題材を得たのである。横浜を画題とした浮世絵は、たちまちにして爆発的な人気をよび、横浜絵とも、横浜浮世絵とも呼ばれて、飛ぶように売れていった。全体で約六百点が制作されたといわれるが、最もさかんに描かれたのは、開港から間もない万延元年（一八六〇）と文久元年（一八六一）の二年間であった。

いわゆる横浜浮世絵の主要な題材となったものには、三種が挙げられる。第一は、開港場として整えられてゆく横浜の絵図である。第二は、港崎遊廓と、そこに遊ぶ外国人の姿である。第三は、居留地の街並と、外国人の暮しぶりである。そのほかにも相撲や見世物、あるいは海外の風物を描いたものなどがあること、いうまでもない。これらの作品によって、年ごとに栄

えゆく港ヨコハマの姿が、生きいきと描写されたのであった。

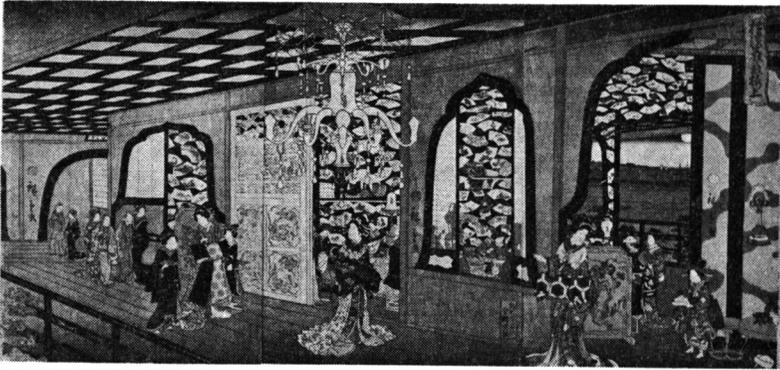
絵図は、おおむね鳥瞰ちようかんの手法によって描かれた。開港当初の風景を描いた「大絵図」から、しだいに整備され、発展してゆく街区、そして海岸から山の手に拡大してゆく市街の有様が、一連の絵図を見ることによって、くわしくたどることができ。それは地図であると同時に、町名や商館の案内図でもあった。

これと類したものに、名所絵があった。御貿易場をはじめ、関内や関外の光景、また横浜八景や二十八景など、至るところが画題となっている。しかも名所のなかに、外人の姿か、異国の文物が、必ず登場している。かつて名所絵といえば、美しい景勝や、寺社の建物などが主題であった。それが横浜絵においては、異国情緒が主題もしくは添景となっている。

港崎の遊廓風景は、さまざまな角度から描かれた。とくに評判だったのは、岩亀楼における異人遊興の風景である。三味線の伴奏につれて手足をあげ、踊り舞う洋服の異人の姿は、当時の風俗を何よりもよく物語る。遊廓の娼妓のほか、街頭に私娼もあらわれていた。外国人に囲われる洋妾(ラシャメン)もあった。そうした人びとの姿も、横浜浮世絵に登場している。

名所絵のほかに、外国人の風俗そのものを写した浮世絵があった。異人は、よく遊行する。目的もなく、ただ街上を歩くという光景は、当の日本人にとって異様なものであった。日曜日はドンタク(オランダ語のなまり)と呼ばれ、異人は隊列を組んで街頭に乗り出した。おのおの国旗を押し立て、楽器をならしながら練り歩く。最も珍しい光景であった。

こうした横浜絵を描いたのは、主として歌川派の絵師たちである。初代広重の没後、そのあとを継いだ二代および三代広重、また豊国系の人びと、国芳系の人びとが、横浜絵に活躍した。なかでも豊国系の貞秀は、五雲亭または玉蘭齋などと号し、開港の当時すでに五十歳をこえていながら、最も多くの横浜絵をのこしている。万延から文久にかけて絵図をはじめ、遊廓風景、外人風俗などを描きまくった。とくに横浜絵図は、たんねんに調査をかさね、忠実に当時の実景を写しており、地図



横浜岩亀楼上(広重画)

神奈川県立博物館蔵

として見てもすこぶる正確なものであった。

### 居留地の風俗

日本人にとって珍奇とうつつた居留地の風俗は、絵に描かれたほかに、文章によっても紹介された。浮世絵師の玉蘭斎貞秀は、絵と文とをまぜ合わせた小冊子『横浜文庫』前編三冊、後編三冊を、文久二年（一八六二）春、つぎつぎに刊行して、開港場における見聞を伝え、当時のベストセラーとなった。同書は『横浜開港見聞誌』としても知られる。その記述によって、風俗の一斑をうかがいたい。

横浜渡来の異人商館町 右左ともに向ひ合て門有 青色又ハ緑青黒色ハ多く見ゆるなり みな其色々にてぬり立 或ハ又石蔵を以て門の左右にかまへ 門の柱に表札あり 英国士官 洋行なぞ書付あり 又亜墨利加三十三番ウエンリイト 此ごとく番付たるもあり 館内にハ犬多く最も種類多し 時によりてハ日用出入見おぼえ有商人にても時ならずかみ付かんいきおいにて飛来るに 本町見世の使ひの者 胆をひやして逃かへるもあり 此犬いよく右のごとくなれば其犬の主人 小鉄砲を以て打ころすなり………

…どんたくの日ハ商館にても旗を立 船印と同じ 波戸場に出て見渡せば海上も舶す処の帆綱に小旗を数多付ともの方にハ大旗を立 船中の異人 此日 陸に來りて遊行す 港崎町の遊女を初め茶屋の娘まで七月盆中踊りをなす 仲の町にあつまりて 一同はでやかなる衣を以て 白き手拭にて若き娘など頬かむり 或ハはち巻 又ハゑりにまとひ手



港崎町外国人盆踊図

『横浜開港見聞誌』から

に団扇うちわを上げて手びやうし足どりを揃へて歌舞をなすに見物人の山をなせり異人ハ元より黑人又ハ南京人ハ常に踊るなれば毎夜この港崎町に來りいて是を見物なしてうら山しく思ひしや後にはたまり得ずチャンノ頭をふり廻し両手をあげて踊り込この踊 七月中ありて止まりたるに 八月八日ハ大どんたくにて定まりのごとく勝手に遊樂することなれば波戸場の広き所に出て男女つどひ集 真丸に並居 一千人男異人大なる太鼓を出して打込バ 其音につれて何やらん声をはつして一同に踊りたれ 盆をどりのやうなれども 異州にあることにや 手先足元よく揃ひたることなり

つづいて文久三年(一八六三)には『横浜奇談』が刊行された。やはり居留地の風俗を、くわしく紹介している。その一文をかかげよう。

異人屋敷にハ士官と商人とあり士官の分ハ官名ミニストル コンシュル あるひハ通弁官またハ船將とありて 銘々彼国の旗驗をおしたたり 商館にハその旗はなけれども商用の看板らしき旗あり いづれも屋敷の造り方ハ壁にハ尺石を積みかさね障子ハギヤマンにて張はり間毎まごのしきものハ五畳じきあるひハ十畳敷等 いづれも沓枚織にて色々の模様あり その美しき事 美花を布ならべたるごとし……………扱さ異人朝暮の行状ハまづ朝五ツ半時頃四ツ時に目を覚し すぐに入湯するなりその湯のぬるき事ひなた水のごとし 中にハ暑寒ともに水ばかり 貴ぶものもあり 夫それより常に懸置かかけところの姿見鏡四尺位なりにむかひうがい手水ちようすいをつかひ 髪を直しシヤボンあかをと または匂の水をもって薄化粧などいたし 夫より服を着替るなり 何れも黒羅紗にてその地合のよきこと革のごとし 又身奇麗みぞれいなる事 我国の人に替る事なし次に食事

におよぶ 麦粉にて製したるパンといふものを食す 其外<sup>そのほか</sup> 牛肉豚肉 果物等なり 酒は種類おほけれども いづれも多分に飲でも深く酔事なし これは我國の酒とは替り 穀類にあらずしてらんびきにて 果物よりとりたる酒なれば 氣ハ強けれども 醒る事<sup>まよ</sup>ハいたつてはやし 食事は朝夕二度なり 煙草ハいづれも好<sup>す</sup>にて少しの間もはなす事なし されども我國のたばこと違ひ つよき事はなはだし 我國のごとく内へ引て吸ときハ 目のまはる程なり 彼等ハふかすばかりにて吸こむ事ハなし おりく 唾をはくなり これは常にたばこをふかし唾をはけば悪氣を吐出す故に無病なりとぞ さて又異人の馬に乗ることハ 小児の頃より男女ともに乗習ふなり 勿論流義などといふ事ハ更になし 只いつとなく乗馴<sup>のりな</sup> 自然と達者にのり覚るゆへ その駆引自在なり あるひは血氣運動のためにとて 用なき時とても館内市中をも歩行いたす事もあり 我國のものゝいたさぬことなり

## 二 新聞の発刊

### 新聞紙の誕生

居留地では在留外国人の手によって、新聞紙も発行された。外国人むけのものであったから、もちろん最初は英字新聞である。なお当時の日本語において「新聞」とは「ニュース」の訳語であり、Newspaperは「新聞紙」または「新聞誌」と訳された。

一八六一年（文久元年）六月二十二日、長崎において『The Nagasaki Shipping List and Advertiser』と云う英字新聞が発行された。これが日本における最初の新聞であって、週二回刊、発行者はイギリス人の貿易商ハンサード、A. W. Hansardであった。この新聞は二十八号までつづいたが、やがてハンサードは横浜に移り、同年十一月二十三日に『The Japan Herald』



んでドイツ人に経営が移り、一九一四（大正三）年九月まで発行がつづけられたが、日独戦争（第一次大戦）によって廃刊された。

一方の『The Japan Commercial News』は、やがて『ハラルド』との競争に敗れ、休刊するに至った。そこで横浜で銀行を経営していたリックビー Charles Rickerby が会社を買収し、一八六五年（慶応元年）九月八日、『The Japan Times』と改題して発刊した。週刊紙であったが、ページを一号分とし、記事もくわしい。この『タイムズ』は一八六九年（明治二年）十二月までつづいて廃刊となった。そのあとをうけてイギリス人ハウエル W.G. Howell の発行したのが『The Japan Mail』である。一八六八（明治十一年）一月には『タイムズ』も、リックビーによって復刊される。そして七月には『マイル』と合併し、『The Japan Times』の題名の下に『and Mail』の文字を入れて発行をつづけた。

このような外字新聞に並んで、邦字新聞もしだいに発行されるに至る。初めは幕府の手によって、文久二年（一八六二）一月から『官板バタバヤ新聞』が発刊され、三月からは『官板海外新聞』と改題された。これはオランダの新聞と蕃書調所において翻訳、編集したものである。半紙二つ折りを五、六枚にまとめて、冊子体にして発行された。今日の感覚からみれば、新聞というよりは雑誌の体裁に近す。

文久三年（一八六三）になると、横浜の英字紙を翻訳した邦字紙が発刊された。さきの『The Commercial News』を翻訳したものが『横浜新聞』であり、ついで『横浜新聞紙』『日本貿易新聞』『日本交易新聞』などと題名を改めながら、慶応元年（一八六五）までつづいた。また『The Daily Japan Herald』を訳した『日本毎日新聞紙』も文久三年九月に発刊されているが、数号で廃刊となっている。こえて慶応元年八月には、『The Japan Times』を訳した『日本新聞』が発刊され翌年八月まで五十五号を数えた。

「新聞の父」 このように横浜の英字新聞につづいて、数種の邦字新聞も発行されるに至った。しかし『官板海外新聞』  
ジョセフ・ヒコ にしても、『日本貿易新聞』や『日本新聞』にしても、外字新聞の翻訳であって、日本の新聞として編集されたものではない。かつ新聞と称したもの、体裁は雑誌に近く、発行も不定期であった。本当の意味における日本の新聞は、ジョセフ・ヒコの発行による『海外新聞』の出現を待たねばならなかった。

ジョセフ・ヒコは天保八年（一八三七）、播磨国加古郡古宮村、いまの兵庫県播磨町に生まれ、幼名を彦太郎といった。嘉永三年（一八五〇）、十三歳のとき、海路によって江戸見物におもむいたが、その帰途、暴風雨にあって、太平洋上を漂流すると五十二日間に及ぶ。ようやくアメリカ船に救助され、翌年（一八五二）二月、サンフランシスコに入港した。これより、ヒコのアメリカ生活が始まる。

アメリカにおけるヒコは、はじめサンフランシスコ、のちはボルチモアで暮らした。その間にはニューヨークやワシントンへもおもむき、一八五三年八月にはピアース大統領、五七年十一月にはブキャナン大統領と会見している。また一八五四年にはカトリックの学校に入学し、十月三十日には洗礼を受けた。そのときジョセフという教名を授けられ、以後はジョセフ・ヒコと名のようになったわけである。

日米通商条約が結ばれたのは、一八五八年七月二十九日（安政五年六月十九日）のことであった。この年の六月三十日、ヒコはボルチモアにおいてアメリカの市民権を得る。すなわち日系米人の第一号となった。折りから日本近海までおもむく測量艦に便乗することを許され、十一月にはハワイに達する。ハワイからは、香港<sup>カウホン</sup>ゆきの商船に乗った。このとき同乗したのが、旧知のヴァン・リード Van Reed であった。のちにリードは横浜で新聞『もしほ草』を発刊する（後述）。

香港からは合衆国の軍艦ポーハタン号に乗ることを許され、上海に着いた。ときに五九年五月の末である。ここで初代の駐

日公使として赴任するハリスに会った。そしてハリスから、新しく開かれる神奈川領事館の通訳に任命された。いまやヒコは米国籍の通訳として、ハリスとともに軍艦「シシッピー」号に乗り、長崎・下田をへて、一八五九年六月三十日（安政六年六月一日）、神奈川に入港したのであった。

神奈川（横浜）の開港は七月四日（六月五日）であった。その日、本覚寺にアメリカの神奈川領事館も開かれた。ヒコは翌六〇年二月に辞任するまで、領事館通訳をつとめた、三月からは、横浜で貿易商社を営む。六一年末には、商用を兼ねて再びアメリカに渡った。滞米中の六二年三月には、リンカーン大統領と会見している。こうして十月には横浜にもどり、ふたたび領事館の通訳をつとめた。

領事館に在任中、六二年十一月には、月刊の『商事月報』を発刊した。商事と名づけているが、江戸や横浜の動静、すなわち時事ニュースなども報道している。領事館は六三年九月三十日に辞任した。そして横浜で、ふたたび貿易商社を開業した。

横浜の居宅、居留地百四十一番において、いわゆる『海外新聞』を発刊したのは、一八六四年（元治元年）六月のことである。長いアメリカ生活において、ヒコは新聞というものの効用を、十分に心得ていた。当時の日本人の誰もが知っていたというニュースを、新聞によって伝えよう、と考えたのであった。単なる外国新聞の翻訳ではない。独自の編集によって記事を選択し、読みものその他を加え、日本語の新聞として、初めて新聞らしい形態をととのえたものであった。のちにヒコは『新聞の父』と呼ばれるに至る。

ヒコの『海外新聞』は約二年間つづいたが、新聞の売行きは思わしくなく、また貿易商社の経営も行きづまって一八六六年（慶応二）十二月には横浜を去る。それから後のヒコは、長崎や兵庫において商業に従事し、晩年は東京に移った。その死去は一八九七（明治三十）年十二月のことである。



海外新聞の表紙

県立金沢文庫蔵

故国に帰ったヒコは、みずから彦蔵と名のつた。アメリカの市民権を得ていたから、国籍はアメリカにあり、世間からは「アメリカ彦蔵」と呼ばれた。しかも生れ故郷から夫人をむかえ、その旧姓である浜田をもって、晩年は浜田彦蔵と称していた。

『新聞誌』と ヒコの自伝『The Narrative of a Japanese』によれば、一八六四年（元治元年）六月二十八日の記事のなかで、『海外新聞』で、新聞の発刊について次のように述べている。

今月中に私は『海外新聞』を創刊した。木版刷りの日本語新聞で、外国のニュースを要約して載せている。これは日本語で印刷されて刊行された最初の新聞であった。この新聞は、今日から私が長崎へ去るまで一約二年間つづいて刊行された。

ここでは『海外新聞』を発刊した、と記されているけれども、ヒコが元治元年に発刊したときの題名は『新聞誌』であった。また木版印刷ではなく、いちいち手書きしたものであった。しかし『新聞誌』時代のものは、現物も、これを筆写したのも、いっさい残っていない。したがって記事の内容も発行の期日や号数も、明らかにすることができないのである。

最初の『新聞誌』発刊から九か月たった慶応元年（一八六五）五月、題名を『海外新聞』と改め、その第一号が発行された。このたびは木版印刷となっている。体裁は半紙を二つ折りにし

て五―六枚つづり合わせ、こよりでとじて、表紙をつけたものであった。表紙には、横浜の港を描いて、富士の遠景を配した図柄を用いた。

各号の巻頭には、何月何日に「イギリス飛脚船、此港（＝横浜）ニ入りしを以て左の新聞（＝ニュース）を得たり」と記し、国別に海外の時事ニュースを採録している。こうした記事は外国紙の記事をヒコが訳述し、本間潜蔵と岸田吟香とが、やさしい日本語として書きおろしたものであった。

海外ニュースのほかには、横浜における相場変動や経済情報も伝えている。たとえば「茶、此品ハ不景気にして下値になれり。」（第三号）、「糸、前橋の極上は競気少しく宜し」（第六号）というような調子であった。さらに第一号から、末尾には次のような口上をのせた。

右のことく各国の新聞紙を日本のこと葉になほし出す趣意ハ各国の珍ら敷噺をも知り、且物の価の相場高下をも弁へ知れハ貿易の為に弁利多きを思ひてなり。英国の飛脚船ハ一月に二度つゝハ此港に来るものなれハ便り有る度毎に速に出版し、又先に横浜在留の異人より出す引札をも訳して添可申候。已上。

ここに述べた通り、引札すなわち広告ものせた。そのころ、広告の効用を知っていた者は、外国人ばかりであり、当時の日本人にとっては、すこぶる珍しく感じたことであろう。

病の治療を受むと望む人々ハ、爾後九ツ半時より七時迄（＝午後一時―四時）に第百八番をとひ給へ。バダール啓

（第十八号）

入歯を成んと欲する御方ハ御尋被下。所持の細工歯御覧の上にて御用被仰付川候之は尋常の骨或ハ象牙蠟石にて造りしに非ず。せとものに類せし金にて造りし故、持甚宜敷つやなど天然の歯に異ならず 三十一番 レスノー謹啓（第十九号）